

「慰安婦」問題を学び社会に出て行く学生たち

石川 康 宏

「慰安婦」問題に取り組む学生たち」といったタイトルで、ゼミ生の学びの様子や学生と接しながら思うところなどを「総論的に」執筆せよとのこと依頼です。「ホイホイ」と気軽に引き受けさせていただきましたが、いざこれを書こうとすると、パソコンのキーを叩く指がなかなか動いてくれません。

それは、すでにたくさんの方を書いてしまっているからです。

学生たちといっしょにつくった本も、『ハルモニからの宿題』（二〇〇五年、冬月号）、『慰安婦』と出会った女子大生たち』（二〇〇六年、新日本出版社、二〇〇八年に東文選より韓国語版）、『慰安婦』と心はひとつ 女子大生はたたかう』（二〇〇七年、かもがわ出版）、『女子大生と学ぼう「慰安婦」問題』（二〇〇八年、日本機関紙出版

センター）とすでに四冊になっています。そこに書いたのと同じことを書くのは、つまらないんですね。

そこで今回は、勝手にちよつとひねらせていただいで、ゼミ生たちの「はげしい学び」に「就職」の問題をくわえてみたいと思います。初めて書くテーマですが、これも、それなりに面白いストーリーになるはずですが、では、まずゼミの学びの様子を、それでも簡単に紹介させてもらおうところから入りましょう。

一、「はげしく学び、はげしく遊ぶ」

私がつとめる神戸女学院大学は、兵庫県西宮市にあります。もともとのスタートが神戸市内でしたので（なんと一八七五年の創立です）、こういう名前になっていま

す。学生・院生あわせて二七〇〇人程度の比較的小じんまりとした大学で、キリスト教主義の伝統にもとづいています。岡田山という、山というには小さすぎる丘の上に、周辺の生活空間からちよつと切り離された世界をつくっています。木々が豊かで、周辺の方がキャンパスをかかえて山を登ってこられることも珍しくありません。

そういう大学世界の中で、私のゼミは文学部の総合文化学科に属しています。この「専攻ゼミ」で学んでいる学生は、現在、三年生が一〇名、四年生が一六名となっています。ゼミは学生たちが選ぶのですが、応募者が多いために、入れない学生も出てきます。自分での何ですが、私のゼミはなかなか「集客力」の高い、いわゆる人気ゼミのひとつです。

私は本来、経済学の教師であり、担当している講義科目は「現代社会と経済学」「経済学」「比較経済論」などとなっています。しかし、ゼミでは、二〇〇四年から「慰安婦」問題を中心テーマとしています（「慰安婦」、歴史問題と東アジアの経済共同といった、ちよつと工夫したテーマをかけたつもりです）。なぜそうなったかという事情については、すでに何度も書いてきました。端折っていうと、二〇〇四年二月に韓国の「ナヌムの家」（元

「慰安婦」被害者の一部の方が集まってくらしている場所です）を訪れて、大変なショックを受けたことがきっかけです。

それ以後、二〇〇四年九月から毎年「夏休み」に、三年生といっしょに「ナヌムの家」を訪れて被害者の体験をうかがい、日本政府に対して問題解決を求める「水曜集会」の現場にでかけ、最近は大日本帝国による侵略の歴史的資料を展示した西大門刑務所（昨年二〇一〇年は韓国併合一〇〇年の年でした）などを見学しています。

通常、大学の授業は一コマ九〇分ですが、私のゼミは毎回五時間行っています。三コマぶち抜きということですが、昨年までは月曜日の三時から八時まででしたが、今年は火曜日の一時二〇分から六時二〇分までとなっています。この五時間という時間は、最初からそう決めていたわけではありません。中学や高校であり日本史（特に近現代史）を学んだ経験のない学生たちと、日本史の専門家でない私がいっしょに基礎から学べば、毎回それくらいの時間が必要になるということです。

「夏休み」の韓国学習旅行は三泊四日で行いますが、この数年は、その前の毎年六月頃に一泊二日で東京旅行を行っています。「慰安婦」問題を専門に扱った日本唯

一の資料館である「女たちの戦争と平和資料館」や、明治以降のすべての戦争を正義の戦争だったと描き、境内にはかつての戦争の戦利品も飾っている「靖国神社と遊就館」、戦争で深い傷を負った元日本兵の戦後の苦労を記録する「しょうけい館」をまわっています。あの戦争のどの側面に注目するか、戦争の基本的な性格をどのよう

はお医者さんや看護師さん、作業療法士や事務職員のみなさんがおられ、講演後も少くない質問や感想が出されていました。

長年、平和運動やいろいろな社会問題にかかわってきた大人のみなさんに比べれば、学生たちの知識や体験の「量」はそう多いものではありません。しかし韓国で元

うに判断するかななどについて、異なる視角をもった資料館を訪れ、学生たちが自分で「答え」を模索する機会を提供するというものです。

九月の韓国旅行のあとには、けっこうな数の講演を学生たちが行います。平和を考える各地の団体、教育関係者の団体、女性たちの団体などから、学生たちに講演の依頼があるのです。二〇〇七年には安倍政権のもとで「慰安婦」問題が世界的にも大きな話題になりましたが、その年には四〇カ所くらいまわっていたのではないでしょう

さらにゼミで何冊も本をつくってきたのは、大学の友人に「慰安婦」問題を知ってもらいたい、社会の多くの人に正確な知識をもってもらいたいという、学生たちの願いを原動力にすることでした。二〇〇九年を最後に出版が途切れているのは、その頃から学生たちの就職状況が急速に悪化したためです。〇八年秋のリーマンショック以後、就職活動はますます大変になり、「就職できないかもしれない」という不安も一段と深いものになりました。そしてもう一つ、残念ながら「慰安婦」問題関

特集・青年の現状と未来

係の本が、たくさんは売れないというこの社会の実態もかわっています。

それでも学生たちは、出版活動をあきらめたわけではありません。いまの四年生たちは、「ナムの家」での元「慰安婦」被害者の「証言」と、学生たちの韓国学習旅行の様子を映像にまとめ、これに解説の冊子をつけたわえた「DVDブック」の出版を企画しています。被害者の「証言」映像を残す努力は、被害者が高齢のために次々亡くなっているという現実を踏まえる意味もふくんでいます。たくさん

どをつうじて、多くの大人と接する機会があるからだろうと思います。

二、「輝いてはたきたいアナタへ」

先ほど、このゼミはちょっとした人気ゼミですと書きましたが、少なくとも学生がこのゼミに入ることを希望する理由として「勉強は大変そうだけど他のゼミではできない体験ができる」「大学時代に何かをやりとげたという実感が得られそう」「私もこのゼミでなら人間的に成長できるかもしれない」といったことをあげています（実際には他のゼミでも様々な取り組みが行われているのですが）。それは机の上での学びにとどまることなく、あちこちにかけて普段できない体験をし、講演や出版な

さて、就職や仕事の問題にすすみましょう。じつは私たちのゼミは「慰安婦」問題の他に、『輝いてはたきたいアナタへ』（二〇〇九年、冬弓舎）という「はたらく先輩たちへのインタビュー」を中心にした本を出版しています。様々な仕事をしている二十代後半から三十代前半のはたらく先輩たちのところへ、現役学生が話を聞きにかけていったものです。

この本の最初には私が書いた「さあ、いっしょに『就

特集・青年の現状と未来

特集・青年の現状と未来

職活動』を考えよう」がありますが、それは自分の生活費は自分でかせがなければ、①いつまでも両親が食べさせてくれるわけではない、②いつでもパートナーが稼いでくれるわけでもない（低賃金・失業・病氣・離婚の可能性など）といった「おどし」をかけつつ、その上で、はたらくことの意味を考えようと呼びかけています。

そこで強調しているのは、仕事をする、そのために就職先を探すということは、①食べていく手段を探すだけでなく（それはとても大切なことですが）、②自分は社会のどういう分野を支え、充実させようとするのか、③自分は三〇歳になった時、四〇歳になった時にどういう力をもった人間になっていきたいのか、それを考えていくことだということです。

学生たちは、多くが家族の保護を受け、生活上の支援を受けている立場ですから、バイトの苦労があつたとしても、こうした話がスルスルからだに入っていくわけではありません。しかし、就職を「いやだけれどしなければならぬもの」と後ろ向きにとらえるのではなく、「社会に役立つ自分になる」「仕事を通じて成長できる自分が展望できる」と、前向きにとらえる視角を伝えることは、新鮮な励ましとして受けとめられているようです。

人間には「生きる希望」が必要で、それは若い世代にとっても同じです。いまの世の中にはそもそも求人が少なく、あつてもそれだけでは満足な生活ができない低賃金の雇用が多くなっていますから（特に女性には）、学生たちの耳には「なんとか就職しなさい」「しないと生活できない」「どうやって生きていくの」という話ばかりが入ってくるがちなのです。

ここは、つい「生活のために」とばかりいつてしまう大人の側に、自己点検が必要なのところかも知れません。さて、インタビューをした卒業生ですが、女性差別をきらって国家公務員になったAさん、証券会社から夢を求めて航空会社に転職したBさん、三〇歳をすぎて居酒屋の経営をはじめたCさん、職場の労働条件の悪さから転職したDさん、からだをこわす体験をへて鍼灸師になったEさん等々、同じ大学の同じゼミを卒業しながら、それぞれの生きる道は様々です。

学生たちには、このように道が多様だという事実を伝えることが大切です。それぞれが違う道に進むということは、在学中から少しずつ違う方向を向き、それに応じた準備をせねばならないということです。

特集・青年の現状と未来

ところが「出る杭は打たれるのだ」とばかりに、「まわりの人と同じことをしなさい」式の教育（や無言の圧力）を受けて育ってきた学生たちには、悲しいかな、そこにスムーズに進むことができない人が少なくないのです。そこは、ちよつとていねいに背中を押してやる必要があります。「みんな違っていいんだよ」「結果的に、おなじでもいいけれどね」「自分の道を自分の願いにそって考えてみよう」といった話です。このあたりは、技能や知識を伝えるのではなく、本当に「子育て」をしているなあという実感です。

この本に登場する卒業生たちは、多くが「労働条件」「はたらきがい」「女性の地位」といったことにふれています。じつは、そこには大学時代の学びが深くかわっています。この卒業生たちは、ゼミで「慰安婦」問題を学んだ世代ではなく、そのひとつ前の「日本経済と女性の仕事」といったテーマで学んだ世代なのです。卒論には、男女雇用機会均等法、保育所の充実、北欧と日本の比較といったテーマがズバリとならんでいます。

学生たちといっしょにインタビューをしながら、私も、「そう熱心に勉強したわけじゃないだろう」と思う卒業生の口から、「大学でこんなことを勉強したから」

という言葉がたびたび出てくることに驚かされました（笑）。教師の力というのは、こちらが思っているより、ずっと大きな場合があるようです。

その卒業生たちが、現役の学生に対するアドバイスとして異口同音に語ったのは「学生時代にたくさん大人の大人と接しなさい」ということでした。学生時代は、大人社会に出る直前の時期ですから、大人たちとの交わりが必要なのは当たり前のことなのですが、しかし、少なくとも大学の中にはそういう機会はあまり多くありません（関連の授業は用意していますが）。そこは主に学生たちの「私生活」にゆだねられる部分になるのです。

私は、この春「マルクスのかじり方」（新日本出版社、二〇一一年）という本を書きましたが、それ以後、あちこちの学生の前であらためて「学生時代とは何か」について話す機会が増えていきます。それに対するいまの私の回答は、学生時代とは、①教養と専門知識を身につけて一二四単位をとって卒業すること、②子どもから大人への飛躍を達成するために自分の生き方を探り、考え、自信をもって生きる道をみつける飛躍の時期だということです。

そして大学生には長い「春休み」や「夏休み」があ

特集・青年の現状と未来

り、上級生になれば授業の合間の「空き時間」も増えますが、それらの時間に、しっかりと自分の生き方を考えようと呼びかけています。アルバイト、インターシッ プ、留学、ボランティア、旅行などを通じて、たくさんの人に会い、人のいろいろな生き方に接し、そういう体験を通じて自分の生き方を考えるということです。そのためには、自宅とバイト先と大学だけをグルグルまわっているような、そういう日常から外に出ることが必要です。

もちろん読書も大切です。学部や学科の学びにとられない、自分の生き方を育てるための学びです。たくさん「人生」が凝縮された小説はともいいですし、マンガにもいいものがあります。そして、ねんのためについておけばマルクスも面白いですね。マルクスは私たちが生きている資本主義の仕組みを根本から考えさせてくれますし、いまある問題に自分をあわせるだけでなく、社会を変えることでそれを解決していく「生き方」を考えさせてくれます。

これらのことは、裏を返せば、若い世代の育ちを励ますための大人の出席はたくさんあるということです。べ

テランは、それこそ「人生の先輩」なのです。ただし、注意すべきは、若い世代が求めているのは、自分たちがぶつかっている問題に何かの答えやヒントを示してくれることであり、自慢話や説教を聞きたいわけではないということです。

ベテランのみなさんに求められるのは、むしろ失敗談を語ることです。あのとき、こうしていればよかった」「あのとき、こんな理由で失敗してなあ」「若かったなあ」。そんな話が、若い世代にはとても参考になるのです。「世の中には、そんなことが起こるんだ」「自分も考えておかなくちゃ」。そういうことが、リアルに伝わってくるからです。そして、そういう「失敗」を隠さず語ることでできる大人は、若い世代からちよとした敬意を受けとることもできるでしょう(たぶん)。

三、「慰安婦」問題世代の新しい就職

では「慰安婦」問題を学ようになった最近の世代の就職活動には、どんな新しい特徴があるでしょう。これがまたなかなか面白いのです。

思い出してみると、就職活動にかかわって最初に学生たちのあいだで話題になったのは、面接で「慰安婦」問題を勉強している」といった時に、これがマイナスになりはしないかということでした。これは切実な問題です。そこから「面接では女性問題とごまかしている」といった「工夫」も出てきます。

でも、その一方で「それを理由に採用しないような職場には、私はいかないから」と、自分たちがつくった「慰安婦」問題の本を、就職活動での「自己アピール」として前面に押し出す学生もあらわれました。面白かったのは「これからはアジアからのお客さんが増えるから、そういう事情がわかるスタッフがいた方がいい」という理由で、その学生をある大手の老舗ホテルが採用してくれたことでした。「資本の論理」というのは、いろんな形ではたらくものです。

そんなふうに学生たちの対応はいろいろでしたが、「慰安婦」問題を学ぶようになって、ゼミ生たちの就職率は落ちませんでした。むしろ、全学的にも優秀な数字を残しつつけているのが事実です。

その上での最近の新しい変化ですが、この二年ほど、

いろいろな運動団体への就職や転職がはじまっています。昨年、ある卒業生が旧財閥系の大手銀行を辞めて、保育関係の全国組織の本部に転職しました。そこをつなげたのは私でしたが、「お金もうけ第一より、社会の役に立つ仕事を」という決断を下し、その能力を評価してもらえたのは卒業生自身です。これは私にとっても初めての体験でした。

するとその直後に、今度は現役の四年生が、中小企業関係の団体の大阪の本部に就職したのです。なかなか思うように就職先が決まらず困っていた学生ですが、これについても「どこに就職してもしんどいんだから、どうせなら世の中の役に立つ仕事がしたい」というのが決め手でした。「私でつとまるんでしょうか」「無理だったら辞めればいいんだから」と、なかなかドライな判断でした。

そして、そんな噂が広まってか(？)、いくつかの団体から、私のゼミに「いい学生がいたらよろしく」とリクルートの声がかかるようになってきました。こういう団体は、一昔前なら学生運動を経験し、社会運動への取り組みにすでに慣れた人たちを採用したのでしょうか、

特集・青年の現状と未来

いまは条件がかなりかわっています。そこで「ハローワーク」などを通じて募集はするが、そうすると、いわゆる「即戦力」にはなりにくい。そんな事情もあるようです。

当たり前のことですが、ゼミは学びの場であって、運動の場ではありません。実際、私のゼミでも講演などは、希望するメンバーの自主的な活動となっています。そして、いわゆる「学生運動」は、私の大学にはありません（残念なことです）。そういう意味では、ゼミの学生たちも、社会運動の経験らしい経験は、ほとんどできないまま社会に出ます。

しかし、「慰安婦」問題を学習することで、歴史教科書問題、侵略戦争への評価と今日のアジアとの関係、憲法「改正」問題、女性の社会的地位、民族差別をめぐる現実などに、それぞれの批判的な見方は形成されます。講演活動などで、活発にいろいろな取り組みを行う大人と接することが、社会に対する見方を深めることにもつながります。そんなふうにして育てられた少しの資質に、白羽の矢が立つこともあるというわけです。

楽しみなのは、こういう学生・卒業生が増えていった

とき、それが三年後、五年後の後輩たちにどういう影響を与えていくかということです。ひよつとすると何年か先には、『輝いてはたきたいアナタへ』の第二弾として、サブタイトルに「よりましな社会づくりをめざす仕事に就いて」なんて書かれた本をつくることができるのかも知れません。

最後に「青年の現状と未来」という特集テーマにふれておけば、現在の青年たちがおかれた環境にはとても厳しいものがあります。だから、その環境をかえる取り組みが様々に呼びかけられているわけですが、同時に見落とされてならないのは、その厳しい時代に負けず、この時代を生き抜いていくたたかな若者の育ちをどう応援していくかという視角です。環境におしつぶされるのも人間なら、環境の苦しさをはねかえし、つくりかえていくのも人間です。逆境に負けない「強い若者」を育て、応援するために大人は何をしていくべきなのか、そういう問題も立てる必要があると思います。みなさんの模索と実践に期待します。

（いしかわ やすひろ／神戸女学院大学）